放送の言語とネット上「口頭」コミュニケーション言語の比較分析

代表研究者　影浦　峡　　国立情報学研究所助教授
（現在は東京大学大学院教育学研究科）
共同研究者　佐藤　真一　国立情報学研究所　教授
〃　辻　　慶太　国立情報学研究所 助手
（現在は筑波大学図書館情報メディア研究科 助教授）

目　　的

ここ数年、インターネット上の映像・音声放送や文字型放送・チャットによる情報伝達が盛んになってきている。こうしたメディアでは、一定のサブカルチャー的コミュニケーション「コード」の存在がしばしば指摘されており、そうしたコミュニケーション領域の発達が既成のメディア表現にもたらす潜在的影響についても議論がなされているが、言語表現とりわけ語彙使用に関する特性は未だ明らかではない。本研究では、現時点における既成放送言語とネット上の言語との特性を分析し、コミュニケーション・メディアの変異に対する言語表現上の差異を特徴づける。

既成の放送の言語とネット上の言語とを、コミュニケーションの位相に応じて分析することにより、言語に現れた伝達メカニズムの相違を明確にすることができる。これは、番組の多様化と放送マーケティング戦略の強化に応じてますます強く求められているユーザ指向の放送言語戦略のための基本的な知見の一環をなす。

方　　法

以下のような手続きで調査分析を行った。

(1) 予備調査と分析枠の設定：
申請者らがこれまでに蓄積してきた大規模放送映像アーカイブにおけるテキスト・スクリプトのサンプル及び比較対象となるネット上のコミュニケーションのサンプルを蓄積し、放送言語分析のために必要な映像種別やコミュニケーション・チャネルの種別、単語・語構成要素への分割基準、語種（和語・漢語・外来語）付与の基準を定める。映像種別やネット上のコミュニケーション・チャネルの類型化にあたっては、言語表現に影響を与えるマルチメディア的な側面（映像・画像と言語表現との依存関係等）にとりわけ注意を払うことにより、分析対象となる言語表現に影響を与える外的要因を考慮できるよう心掛ける。

(2) データ整備：
大規模放送映像アーカイブのテキスト・スクリプトを実際に(1)で定めた映像の種別によって分類し、語彙の傾向を求めるために単語・語構成要素への分割と語種（和語・外来語・漢語）の区別を示すタグを付与する。同時に、ネット上のコミュニケーション・チャネルを一定量蓄積して分類し、単語への分割を含めた同様の処理を施す。

(3) 計量的分析：
(2)で蓄積したデータに対して、映像タイプ／メディア・タイプと語種等の交差分類に基づき、(a) 映像タイプ／メディア・タイプと語／語種の構成及び潜在構成特性を、基本的な記述統計および言語分析のための新たな手法である LNRE モデルにより分析する、(b)映像タイプ／メディア・タイプと語／語種の談話密度特性を分析し、映像タイプ／メディア・タイプごとの語種に応じた語彙構造と談話表現との相関を定量的に明るみに出す。

(4) 定性的分析と解釈
(3)の分析によって明らかにされるような言語表現とりわけ語彙構造と談話との関係を巡

る特性が、映像タイプ及びコミュニケーション・メディアとどう関わるかについて、社会文化論的な側面も考慮しつつ、定性的に分析し、要因と現象との関係を分析することにより、
放送言語をはじめとするメディア言語の戦略的設計に必要な基礎的な要因関係の定式化を行う。

結　果

これまでの伝統的なマス・メディアは、とりわけ日本において、一部の例外を除いて、特権的に、国民国家と「日本語」の重なりに位置する視聴者コミュニティ（日本人）を対象になされてきた。それに対し、インターネットをはじめとする脱領域的コミュニケーションの展開は、マス・メディアと発信者・受信者の布置、媒体の性格を変えるだけでなく、均質な単一言語としての「日本語」の自明性をも変容させつつある。

その具体相を理解するために、「研究（事業）実施の概要」で述べた５種類の国際ニュースを対象に、語種と一人称ダイクシスの観点から傾向を分析した。データの基本数量は以下の通りである：

	文数	字数	延べ	異なり	異なり／延べ
NHK	23,786	1,539,974	911,744	15,668	0.0172
毎日	35,471	1,798,307	1,103,081	28,152	0.0255
JANJAN	10,754	537,430	334,890	19,167	0.0572
Publicity	30,112	1,462,039	911,212	31,529	0.0346
田中	8,247	544,081	325,791	13,182	0.0405

ダイクシス的な「私」「我々」「我が国」（言い替え含む）については次のようになっている：

	NHK	毎日	JANJAN	Pub.	田中
私	66 (0.28)	173 (0.49)	120 (1.12)	1,148 (3.81)	226 (2.74)
我々	120 (0.50)	327 (0.92)	96 (0.89)	346 (1.15)	69 (0.83)
我が国	43 (0.18)	51 (0.14)	3 (0.02)	22 (0.07)	11 (0.13)

語種としての外来語は、固有名を含む数値と固有名を抜いた数値を以下に示す：

	NHK	毎日	JANJAN	Pub.	田中
全	40,503 (4.44)	55,385 (5.02)	18,837 (5.62)	48879 (5.36)	22,929 (7.04)
固有名なし	14,220 (1.56)	24,831 (2.25)	13,175 (3.93)	38,439 (4.22)	9,901 (3.04)

全体的な傾向として、量的な観点からは、語種に関しては、「伝統的」なメディア程外来語（カタカナ表記・アルファベット表記）を用いないこと、ダイクシス表現に関しては、「伝統的」なメディア程一人称単複数は用いないが「我が国」を用いることが明確な傾向として示された（しばしばこうした場合統計的な検定を求められるが、言語における標本未出現要素の問題を勘案するとこのレベルで通常の統計的検定を適用することには意味がない。それよりも質的な根拠を伴う直感的判断を仮説として導出する方が研究手続きとしては妥当である）。

分析対象としたデータは、予備調査の段階で、(1) 言語／受信者コミュニティ（単一言語性と国民国家の重なりが前提されている：NHK／毎日／JANJAN；されていない：Publicity／田中）、(2) 発信者と受信者との関係（あらかじめ受信者と発信者の間に役割概念の相互想定が存在する（役割規定の相互認識を前提としている：NHK／毎日；前提としていない：JANJAN／Publicity／田中）という観点から緩やかに選択したものであり、ダ

イクシス表現については、コミュニティの一様性と発信者／受信者の役割想定が確立しているという前提のメディアは一人称単数表現が少なく、一方で「我が国」という背後からコミュニティを取り込み規定する表現が使われがちであることがわかる。語種については、コミュニティの一様性と発信者／受信者の役割想定が確立しているメディアは外来語の使用率が低い。様々なレジスタにおける語種比率を考慮しなくては分析を深く進めることはできないが、直感的には現在の標準的話者の言語実態には、伝統的メディアよりもネット・メディアの方が近いのではないかと思われる。

現在、量的傾向については、与えられたデータのスナップショットではなく成長曲線の構造的予測の観点から総合的に把握する作業を行っており、質的分析については、受信者コミュニティの階層化も考慮した言語表現との相関分析軸を検討中である。これらは 2004 年度中にとりまとめることができなかったが、2005 年度順次整理して発表していきたいと考えている。

参考文献

１）Aitchison, J. And Lewis, D. M. (eds) New Media Language. London: Routledge, 2003.

２）Crystal, D. Language and the Internet. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.

研究発表

Kageura, K. and Tsuji, K. (2005)
``On the Nature of `Japanese Language' in News Reporting. Actas-II of the IX Simposio Internacional de Communicacion Social. Santiago de Cuba, 24-28 January 2005. p. 861-864.

連 絡 先

〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学教育学研究科　生涯教育基盤経営コース